



NANASHINO-TOUHOKU KENJIN
VALKYRIES
SCV
SABRA CHRONICLES

地獄の季節

一九五〇年十月六日。

「ブルジョワジーは勇敢よ！ 身内の犠牲を恐れないから！」

既にガラスが揃って失われているビル二階の窓から身を乗り出してAK47自動小銃を地上に向け乱射した女子生徒が唾を撒き散らして叫んだ刹那、テロリストが知ったような口を叩くと言わんばかりに数発のパンツァーフアウスト44があちこち焼けて黒ずみ、半ば崩壊している建造物に撃ち上げられた。

「——ッ」

ドイツ製対戦車ロケット弾の圧倒的破壊に曝された眼球が弾け飛んで白い破片を周囲に撒き散らし、続いて爆炎が華奢な肢体を血塗れの桃色へと変える。

「行くぞ」

右半分が不自然に失われた肢体が以前は山形市と呼称され、現在はホテル・ブラボーと名を変えて着地点の見えない非対称戦争の地となっている地獄の底に叩き付けられるのを視認したシャローム兵は擱座した武装ピックアップトラックの残骸の陰から身を出すと、本隊降伏後も抵抗を続けるDRFLA残党をアルカから排除すべくビルに突入していく。

「ゲドル3・5よりアシケロス2・1、援護する」

一方でオリーブドラブの戦闘服を身に纏い、焦げた街路樹に薄汚いロープで吊るされた

何十体もの全裸死体や、狭い通りの至る所に転がる目玉を刮り抜かれた生首に目もくれず疾走する独特な形状のヘルメットを各々被ったタスクフォース・ハヘブレの熟練隊員達と全く同じ姿をした別動隊は、二階建て住宅の屋根上からPKM軽機関銃やM1バズーカの恐るべき火力を解き放って噎せ返りそうなコルダイト火薬の悪臭に苦しみつつも別の窓や壁の大穴から反撃を試みる少女達に鉄と暴力の殴打を浴びせた。

「結果を出した者こそ勝者であり、勝者は全ての発言権を有します」

白煙上げて発射筒から撃ち出された米国製六十ミリロケット弾が穴だらけのビル外壁を吹き飛ばすのと同時に、その七十メートル上空では涼しいヘブライ語を響かせた戦乙女が自分の右斜め下で発砲していたヴァルキリーに向けてガリル自動小銃のトリガーを引く。

ステン短機関銃の九ミリ弾とすれ違う形で急降下した七・六二ミリ弾は先鋭な先端部で濃緑色のマナ・ローブで覆われた左胸を貫くと続いて白磁の柔肌を突き破り、体内の肉や器官を破壊し尽くした上で肉片と共に背中から飛び出した。

「勝ち組だけが権利を与えられる窮屈な世界なんて、間違ってるよ！」

「それらしい言い訳ばかりで何一つ具体的に行動しなかった結果、当然のようにアルカの最底辺に流れ着いてしまった負け犬らしい『お言葉』ですね」

「ほざけ！」

バタフライ・キャット宜しく高露出度の黒い水着だけを長身に纏い、鈍光を放つ背中のレストランに前進翼式の飛行ユニットを装着している精鋭部隊のトップ——シヤローム学園の

ヴァルキリーでもある、サブラ・グリーンゴールド中佐——は酷く拉げた鉄パイプや錆びた空薬莖が無数に転がるコンクリート面に墜落した少女が破裂する音と新たなる敵の怒声で鼓膜を叩かれながら身体を左回転させる。

「一体どういう理由で私達を負け犬だつて言うのよ！」

「このような理由です」

「えっ」

両翼に黄色と黒の敵味方識別マークとイスラエルの国籍マークを入れたS中佐の親友はカウンターの形で叫びながら肉薄してきた戦乙女の顔に自動火器の銃身先端を突き立てた。

「ご理解頂けましたか？」

貫通の反動で華奢な手足が大きく動き、硬く黒い円形が相次いで舌と歯を突き破るが、見事な腹筋を露にしている長髪の歯車は敵が激痛を味わうよりも早く白い手袋で覆われた人差し指でトリガーを引き絶命に追い込む。

「そんなにマウンテイングが好きか！」

「自分は他と違うって思いたいだけの癖に！」

間髪入れずに今度はそれぞれ左斜め上方と右斜め下方から多数のヴァルキリーが一斉に歯車を挟撃せんと彼女と同じようにジェット戦闘機めいた背部飛行ユニットのノズルから青輝なマナ・エネルギーの粒子を放出しつつ高速で接近してきた。

「自分には価値がないという第三者からの評価に背を向け」

美貌や度が入っているのか入っていないのか本人もよくわかっていない眼鏡のレンズを赤黒い返り血で汚したサブラは、まず最初に左斜め上方から急接近してきた一人に対してガリル自動小銃に突き刺さっている死体を右一回転の遠心力を使って放り投げ、

「当然の批判全てをヒエラルキー上位者からの理不尽極まる威圧行為と受け取る弱者は、負け犬以外の何者でもありません」

脳漿振り撒く肉塊が少女に激突するや否や右下に向き直って発砲する。放たれた弾丸はマウンテイングという文字列に強い恐怖心を抱く一人目の額を貫き、傷を舐め合う腐った取り巻きでしかない二人目を経て、最後は身内を陰で嘲笑してうだつの上がらない自分を守るための付き合いを続けていた三人目の後頭部から勢い良く飛び出した。

「負けた側が優しくされることなどあり得ません」

「自分を正当化するために他人を見下す層が……！」

叩き付けられた仲間の死体を至近距離で目の当たりにして嘔吐、口周りと喉元を著しく汚した左斜め上方のヴァルキリーは赤いベレー帽を被ったサブラと同高度に到達するなり大銃を振るうが、右に空挺部隊の、左に海軍特殊部隊シャイエット13のエンブレムが白くプリントしてある生地で覆われた胸を微震させて左一回転した彼女は縦方向の斬撃を虚しい空振りに終わらせ、その流れで右肘を戦乙女の後頭部に打ち入れる。

「自分が正しいと考えるのはいい。でも自己正当化のために他者を踏み台にするな！」
地に落された戦乙女は血混じりの唾を撒き散らしてゆつくりとコンクリート面に足裏を

着ける歯車に対し怒りを込めて叫んだ。

「踏み台にされる程度の価値しかないと感じないのが、貴方の貴方たる所以ですね」

サブラはヴァルキリー特有の超回復で右前腕部の銃創が塞がっていく様子を紫の双眸で見つめながら他人事のように言い放つ。

「私にだって価値がある！」

「では、それを具体的な結果と数字でお答えください。百人中九十九人が認めない価値は価値とは呼びません。それは独り善がりと呼ばれる精神的自慰行為です」

以前はラミアーズの本拠地だった市街地の片隅で急激に怒りのボルテージを上げていく雑魚とは対照的にイスラエルの冷酷な消耗品はあくまでも淡々と言葉を並べ立てる。

「私はイスラエル本国に自分の価値を認められています」

サブラ・グリーンゴルドは小指を折る。

「私はX生徒会に自分の価値を認められています」

サブラ・グリーンゴルドは薬指を折る。

「私はシャローム学園本部に自分の価値を認められています」

サブラ・グリーンゴルドは中指を折る。

「自慢したかったら……他所でやったらどうだ！」

少女は骨を軋ませながら立ち上がり、これもヴァルキリーの特有である五指の折り方を見せたサブラに腰から抜いたナイフで襲い掛かった。

「予想以上に貴方のレベルは低いようですね」

○・三秒後、ヴァルキリーはノーモーションのサブラが放った右ハイキックを食らって底面を激んだ空に向けたショット中戦車の残骸の左側面に叩き付けられた。歪に曲がったキヤタピラや内部に残されたままの焼死体が宙を舞う。

「私は一切の努力なしに今の立場を手に入れたものではありません」

サブラは切れた額から鮮血を迸らせる戦乙女の顔面をサッカーボール宜しく蹴り上げる。「数え切れない人間関係を修復不能とし」

もんどりうって倒れた少女の腹部に軍用ブーツの爪先が食い込み、
「楽しいこと全てを諦め」

何本も前歯が折れた口から胃の内容物が溢れ出る。

「あらゆる努力を積み重ねました」

そしてヴァルキリーの顔は自らがたった今吐き出した汚物に足で押し付けられた。

「しかし私は何一つ後悔していません」

足に力が入り、頭蓋骨の軋む不快感が地獄に鳴り響く。深い傷口から鮮血が噴き出し、押し出されるようにして眼球は外に飛び出していく。

「何故ならば私は、イスラエルという道徳的にも社会的にも正当化されたユダヤ人国家の歯車に過ぎないからです」

サブラが口走ると、仮に生き残ったとしても恐らくは一生何者にもなれないであろう

笑われ者の頭部が砕け散るのは全く同じタイミングだった。



夜十時を過ぎたアルカ西部のツルオカスタン・カモ自治区には夜の帳が下りている。

「大好きです、レアさん」

ベッドの上で自分に覆い被さったサブラの甘い吐息が汗ばんだ左耳を静かに擦るなり、戦慄にも似た感覚がレア・アンシエルの既に濡れて光っている背筋を駆け登った。

「あぁっ……」

女神然とした彫刻のように美しい筋肉質の肉体が興奮と強い期待感で大きく仰け反ってキブツと呼ばれる生活共同体地区に建つ学生寮の一室に芸術的な弧が描かれた。

「もうこんなに硬くなっています」

荒い息が木霊する湿った空気を涼しげな囁きが震わせた直後、まずは両手首を枕の上に乗せたレアの勃起した右乳房先端が力が入っていない唇で包み込まれた。

「——ッ」

舌先で転がすかの如き愛撫で唇、首筋、鎖骨に続いて赤い野苺に生暖かい粘膜の感触が走った瞬間、肩口まで伸びたショートカットの戦乙女は思わず切なげな悦びを喉の奥から漏らして清潔なシーツを掴んでしまう。

「お願いっ……声に……声に出さない……で……っ」

頬を紅潮させ、汗と鈍光を放つ愛の蜜で内股を著しく濡らした戦乙女が哀願めいた声を喉奥から捻り出すと、夜伽ではいつも男役を演じるサブラは一旦口を放す。

「レアさんのここ、凄く硬くなっています」

「だから……ああっ」

生々しい恋愛感情ではなく経験に則った機械的アルゴリズムによって視界に映る淫靡を声に出して彼女の倒錯的な興奮の度合いを高めると、サブラは続いて左側の隆起を暖かく柔らかい粘膜で包み込む。

口では軽い吸引を織り混ぜて小生意気な突起を愛撫しつつ、その三十一センチ右横では唾液ですっかり濡れた紅真珠を刺激し過ぎない程度にそっと指先で挟んで少し引っ張る。

「ふっ……んっ……ああっ……」

しかし、興奮の度合いを高めていくレアの小粒な肉豆を捏ねくり回すサブラの指捌きはあくまでもソフトなタッチだった。真正面からの緩い強弱が付いた圧迫と解放の二連続、優しく押し込んだままの全体回転……そして最後は触れるか触れないかの絶妙な力具合で表面に円を描く愛撫。

「レアさん、もっと激しく乱れてください」

さも当然のように女役として淫らな責めを甘受するレアの鮮やかな赤みを帯びた耳元で囁くや否や、経験に基づく言葉での愛撫も惜しまないサブラは人差し指を汗の滴が幾つもの

浮かぶ相手の腹筋のラインに沿って這わせる。

やがて指は体温を高める白磁の太腿に移り、更に付け根へと向かった。

「レアさんが私のことを好きだと大声で言いながらおしっこを漏らす様子が見たいです」

「駄目……っ、お願いだから……声……声に出さないで……っ」

「これは男女が行う本能のセックスでもなければ、純然たる繁殖行為でもありません」

サブラは遂にレアの股間に萌えたモヒカン族の頭髪の少し下にある、淫らに咲き誇った全宇宙と響き合う紅い肉裂に指を滑り込ませる。

「満たします、レアさん」

「えっ……何……っ？」

悦楽の源泉が思いやりの込められた動作で愛撫され、鍛え上げられた肉体を持つ美しい雌同士が唾液に塗れた互いの舌を濃密に絡ませ合いながら水音を寝室に響かせ始めてから七分十二秒後、サブラはレアを今や濃い染みだらけになったベッド上でうつぶせにした。

次に膝を立てさせると掌で包み込むように腰から巨大なる熟れ桃の下側に向けて両手の指を這わせる。すぐにレアの口から小さな嬌声が漏れた。

「私はレアさんの一番弱い所を知っています」

豊臀の中央に向かって静かに人差し指を撫で下ろしたサブラは、次に小暗い割れ込みにそっと第一関節を潜り込ませ、上から下にかけてなぞる。

「やめっ……」

全身に走った歓喜と、これから起きる事態を予想したレアの制止も虚しく歯車の両手が尻肉を左右へと広げていく。芳醇な香りを放つ熱い湯気が立ち昇り——うっすらと周囲に毛が生えた倒錯交尾の穴が露になった。

「駄目っ……そこ……汚いから……」

「レアさんの肛門の匂い、大好きです」

「馬鹿っ……だから声に、声に出すなあっ……!!」

だがレアの言葉とは裏腹に、幾度となくサブラの舌や指、ドイツ製の卑猥過ぎる性具を受け入れてきた柔らかい菊門は物欲しげな収縮を既に繰り返している。

幾重にも集まった不浄の肉門の皺に舌先が触れ、レアがそれに気付いて枕に埋めていた顔を上げる前に薄桃色の軟体動物がすばまった入口を押し広げて内部に侵入した。

「ああっ……」

敏感な腸壁を舌が撫でた瞬間、排泄器官を犯されているという背徳を大脳で即理解したレアの全身に百万ボルトの快感が走る。

「ふあああああ——っ！」

今夜初の絶頂によって筋肉盛り上がる背中が再び大きく仰け反り、快樂で紅潮した女の全身から熱い汗滴が弾け飛んだ。

「火星に……っ！ 火星に農場が……できちゃううううっ！」

そしていつものようにレアのネジは外れ、下手をすれば一晩にも及ぶ、噎せ返るような

肌の触れ合いはその後も数時間にも渡って続いた。



一九五〇年十月七日。

「もう……参ったわね……」

学生寮自室のリビングでタスクフォース・ハブレのナンバー2である中尉が漏らした溜め息の原因は昨晚の情交で絆創膏だらけになった自分の喉周りでも、連日の激し過ぎる前後運動で限界が近付いている腰でもなかった。

「こんなことをされたら、誰だって死ぬまで抵抗するわよ」

机上には白いコーヒークップの他に、金属バットで滅多打ちにされた死体や生首の山、側頭部に銃口を押し付けられて涙を流しながら仲間の肉入りスープ完食を強制させられる兵士の正視し難い無残な姿がある。

「誰だって……」

写真は全てドラケンスバーグ学園時代から付き合いがあり、現在同棲中の自分の友人がDRFLA残党に対して行っている恐るべき残虐行為を撮影したものだだった。

「これは駄目だって、ちゃんと本人に言わなきゃ」

八月戦争での敗退後、降伏を拒否してホテル・ブラボーに逃げ込んだDRFLA残党の

掃討を命じられたサブラは激しい攻撃に留まらず恐るべき残虐行為でも敵に想像を絶する恐怖と絶望を与えたが、却ってその非人道的極まる行為が猛烈な抵抗を誘発してしまい、今やシャローム学園の中心戦力はいっ終わるとも知れない市街戦から抜け出せないでいた。

「新しい体の具合はどう？」

当然シャローム学園の主たる役割は本国イスラエルの尖兵としてアルカでの代理戦争を遂行することであり、本来の目的に使われるべき兵士達が必要な場所に存在しないという事実故の問題が起き始めてはいるが、責任者を糾弾せんとするレアの決意は静かにドアを開けて入室した当人の姿を視認するなり即座に霧散してしまった。

「悪くはありません。しかし、完全に適合させるにはもう少し時間が必要かと」

ティエラ・ブランカにおける麻薬戦争ではゼータなる組織を率いて敵軍を尽く殲滅した女性将校は優しげな微笑みを公私混同が著しい美女に送る。

「そう……でも水着で戦うことはないでしょうに」

レアの言葉の端々からは距離感の掴めない不用意な発言で眼前の少女を傷付けてしまい、それによって自分が精神的苦痛を味わう悪夢に対する強い恐怖心が見え隠れしていた。

「余計な装備があると正確なデータが取れません」

今は薄い水色とグレーの学園指定ジャージに長身を包んでいるサブラの肉体は実際の所消耗品であり、彼女の本体はマナ・クリスタルと一体化している心臓なのだ。

「本当なら全裸で戦うのが一番なのですが」

初めから最強のヴァルキリーを作り出すのではなく最終的に最強になるヴァルキリーを作るという目的で作られた戦乙女は、今月十一日から十三日にかけての表沙汰にできない諸々で何百回目かの身体喪失に見舞われてしまい、現在は各種調整を戦場にて行っている。

「あ、あのさ」

ふと机上の残酷な写真を目にしたレアは本題を思い出して注意しようとする。

「今日の夜は……何を食べようか？」

結局、彼女は本題には踏み込めなかった。



「シャローム学園の不敗神話が崩壊」

アルカ学園大戦のヒエラルキー上位に立つ隻眼の少年はブラウン管越しにそれを伝える執務室のテレビ画面から手元の報告書に視線を移す。

「確かにこれは小さな敗北かもしれない」

右だけの鋭い視線が紙上の文字列を撫で、エーリヒ・シュヴァンクマイエルは少し前に行われた第九次ダイヤモンド戦争においてシャローム学園がヴォルクグラード人民学園に建校以来初の大敗北を喫し、前者の母国であるイスラエルがアフリカ・アンゴラにおける給料三か月分の採掘権を喪失した事実を再確認した。

「だけど、イスラエルだって無敵じゃないという事実は多数に勇気を与えてしまう」

アルカ南東部の学園都市タカハタベルクに聳えるSW社の営業所内部で、かつて自らもプロトタイプやヴァルキリーによる民間軍事企業の運営とその大成功という事実で多くに勇気と希望を与えたパイオニアは書類をクリアファイルに収めた上で引き出しに戻す。

「却って良かったんじゃないですか？」

施錠音の直後、執務室のソファに腰掛けていたヴァルキリーが自らの見解を述べた。

「イスラエルはアルカにシャローム学園を建設して以来、この場所では反則技とも言える権謀術数を駆使して急速にのし上がりました」

キャロライン・ダークホーム——DH社を率いるポニーテールの赤髪と碧眼の持ち主は長い足を組み直す。

「生徒数の少なさ故、サブ公……失礼、サブラ・グリーンゴルドのような優秀な一個人に多くの役割を担わせなければいけないのは仕方ないでしょう。彼らは常に一枚のカードに全てを託し、その度に大博打に勝ってきた。それは高く評価されるべきです」

非常に心地良いクイーンズ・イングリッシュの音色を響かせる『好都合な自分の敵』にエア・ヤマガタの筆頭株主は信頼の込められた頷きを送る。

「でも、一度の敗北が祖国の即時滅亡に繋がる恐るべき危険を知りながらも具体的対策を一切講じていない点は頂けない」

続いて彼女が口にした「大体ヴァルキリーってそんなに優秀じゃないんですよ」という

言葉には強い説得力があった。

「優れたヴァルキリーに統制能力を集中させ、組織の至らない点は権謀術数によって補う方法にも遂に限界が来たことを今回の敗戦は意味しています」

アルカというシステムを考案した人間の歪み切った性癖が反映されたと言っても嘘とはいい切れないヴァルキリーでも通常兵器や各兵科の協力・支援なしにBFで戦えば容易く命を失い、アルカの春で人民生徒会を打倒したマリア・パステルナークが短期間とはいえヴォルクグラード人民学園の政権を掌握できたのも専門知識を持った生徒達のサポートがあったからこそだった。

「第九次ダイヤモンド戦争がシャローム学園の敗北に終わったのは、サブラがDRFLA残党掃討のため一線級の精鋭部隊を手放さず、その結果としてBFへの二線級部隊投入を余儀なくされたからです」

「今まで彼らの頼みの綱だったモサド等の諜報機関も満足に人員の補充や育成を行えず、ヴォルクグラード学園軍は再建されつつあることに気付けなかった。いや、もしかすると気付きつつも『今まで勝てたのだから』と希望的観測に走ってしまったのかもしれない」

テイエラ・ブランカの麻薬組織とも少なからぬ繋がりを持つ元MACTのリーダーはどこか疲れたような様子で元PSOB・SAS隊員の推察に自分の見解を付け加えた。

「サブラは自分の経験にしか頼らない。それが彼女の強さだけど、同時に弱さでもある」
「今までは運良く全て正解でした。でも、貯金だけでいつまでも満点は取れません」

「その通り。全ては日進月歩で変化していくんだよ。昨日の正解は今日の間違いになり、今日の間違いは明日の正解になる」

そこまでエーリヒと会話を交えてから、キャロラインは天井を見上げて小さく息を吐く。「無自覚の悪意に対する自浄作用を持たない世界は、それそのものが悪である——か」



「終わるべき時に終わらないと存外辛いものだね」

ホテル・ブラボーの見るに耐えない廃墟と化したビル群を縫うように低空飛行していたノエル・フォルテンマイヤーは複数方向からの不快感に気付いて停止した。

「全能の神様だってそれに気付けない」

テウルギストと呼称される人類最初の戦乙女は滞空しながら爬虫類めいた縦スリットの赤い瞳から伸びる視線を無残な学園都市の成り損ないの各所に向ける。

「ほう」

右前方に建つビル三階の窓際にB・10無反動砲を構えたヴァルキリーの姿があった。

「ほほう」

左後方のガスタンクの上にはソ連製対戦車ライフルをこちらに向ける同種が確認できる。「申し訳ありませんがテウルギスト、お引き取り願います」

鼓膜を叩かれたS W社統括本部長がショートカットの金髪を揺らして正面に向き直ると、また別のヴァルキリーが青い輝きを背にして自分と同高度に滞空していた。

「三秒以内に退去頂けない場合は暴力による制裁を加えます」

「数字の八と九の違いは？」

第三十二大隊やタスクフォース609を経て今はアルカ最大の民間軍事企業に身を置くノエルは瞬間的に「えっ？」と困惑の声を漏らしたヴァルキリーの真後ろへ移動、

「駄目だね……楽しくない」

ここ最近人生全てに強い閉塞を感じ、自分探しのためこの場所にやってきた自由意志の権化は相手の高圧的な物言いが著しい精神的疲弊が原因であることを即座に看破、

「数字の八には穴が二つ」

その他大勢とは異なる赤いマナ・エネルギーを二本の後退翼が伸びる飛行用の装備から振り撒いて根拠なき権威を誇示した敵を蹴って逆さまにすると開いた足首を左右から掴む。

「丸は一つの穴と、垂れ下がるおちんちん」

ノエルがそれぞれ反対方向に力を加えた刹那、目の下に濃い黒の縁取りを作った少女の肉体が絶叫と共に背筋凍る不快音を立てて両断された。

「何一つ楽しくない」

製本版に続く



<http://humandust.blog.fc2.com/>